

Letter from Copenhagen

コペンハーゲン通信 7 Part II

◆ハマーヌフスの遺跡

北欧最大といわれる中世の城跡。風化して崩れ落ちてくる石を積み直す作業が定期的に行われているものの、目的はあくまでも「現状維持」。本格的な復元は考えていないそうです。

デンマーク王国 DATA

人口551万人(≒北海道)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「国際競争力5位(WEF)」「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。

当会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に
出向しています。国際競争力や人々の幸福度が高い評価を受ける
デンマークからの現地報告を不定期にお届けします。

“Bright Green Island” の挑戦



ボーンホルム島

なぜここがデンマーク領?という場所に位置するボーンホルム島。その小さささえ、走行距離に限りがある電気自動車の実用実験にとっては「強み」になるのだとか。

人口4.3万人、面積590km²。コペンハーゲンから東へ170km、スカンジナビア半島南端を横断した対岸、バルト海上に位置するボーンホルム島は、その多様な魅力でデンマークはもとより近隣諸国からも多くの観光客を集めています。

なだらかな丘陵が続く美しい風景、中世の昔から現代まで戦略上の要地として領有権が争われてきた複雑な歴史、工芸作家のアトリエが点在する町並み、質の高い乳製品や地鶏・燻製等の特産品と、数え上げればその魅力は尽きません。

ただし、今回私が出張の機会を得、垣間見たのはまったく新しいボーンホルム島の顔、「Bright Green Island」としての顔でした。

島内には実用レベルで風力発電、バイオマス地域暖房システムが導入されつつあり、「2025年までに100%持続可能エネルギーに切り替える」という目標の下、エネルギー供給、住宅、交通などさまざまな面で技術・社会実験が進められています。こうした島の生活全体をより「Green」にするための先進的取り組みに加えて、ボーンホルム島は近年、環境・エネルギー技術の実験場として、国際的な関心を集めているのです。今回聞いただけでも、スマートグリッドと電気自動車を組み合わせたエネルギー・システムの実験、電気自動車の実用化実験、「環境に優しい農業」に関するプロジェクトなどが今後ボーンホルムで展開される予定とのこと。米国、イタリア、中国、韓国等世界中から日々問い合わせが相次いでいるそうです。

こうした今日のボーンホルムの成功の発端には、島の衰退に対する強い危機感があったと言います。「私たちの究極的な目的は、島の人口を増やし、自治体としての活力・自



樋口 麻紀子

在デンマーク日本大使館一等書記官
(経済同友会事務局より出向中)

律性を維持することです」とは、視察や実験プロジェクト受け入れの総責任者であるボーンホルム・ビジネスセンターのグローニング所長の言。

ボーンホルムはもともと酪農と漁業の島でしたが、バルト海での漁獲量規制強化に伴い主要産業の一つが衰退してしまいました。多くの島の若者は、教育を受けるため島外に出てそのまま戻らなくなり、じわじわと人口が減っていきます。

こうした中、2006年に政府の支援によって「成長フォーラム」が設置され、ボーンホルムの自立・成長の確保に向けて議論が尽くされました。結果策定された「Bright Green Island 2014」という成長・ブランド化戦略に基づき、市と地元企業が連携してさまざまなプロジェクトに取り組んでいます。島の最大の魅力である美しい自然という強みを活かし、「先進的環境立島」としての存在感を高めることで世界各国から人や資本を呼び込む戦略を展開し始めたのです。

「デンマーク政府にいくら陳情しても、ボーンホルムに大学が設置されることはないでしょう。でも今や世界中の大学、研究機関がボーンホルムに人を送り込もうとしています」とグローニング所長。2014年、そしてその先の将来に向けたボーンホルムの挑戦は始まったばかりですが、その言葉には早くも確固たる自信と島への誇りが溢れているように感じられました。



◆丘陵と風車

あいにくの天気でしたが、丘の向こうに風力発電タービンを発見。島の電力の30%は風力発電で賄われているとのこと。

◆町並み

ボーンホルムにとって景観も重要な資産の一つ。伝統的な造りの家を購入するには、年間を通じた居住が義務付けられる上、家によっては窓枠の塗り替えにも自治体の許可を得る必要があるそうです。

